

私を支える物

神奈川県横浜市 高校2年 中原理恵

私が初めて海の遙か彼方を意識したのはいつだったか。それは小学校3年生の夏。河口湖のほとりで家族でキャンプをしていたときだ。2日目になり、近くに新しい家族がやってきた。犬好きの私は、そのテントから大きなゴールデンレトリバーが出てくるのを見て、自然とその犬に駆け寄り、生まれて初めて、青いガラス玉の目を持った赤ちゃんを見た。揺りかごの中を食い入るように見つめていた私に、その両親と思しき人が、何か語りかけながらプロムを手握らせてくれた。赤ちゃんと同じ目の色の、大きな2人の「日本人ではない人」。その時私が彼らにどう反応したかは覚えていない。覚えているのは手に握ったプロムの鮮やかな紅と、私を見つめ返したガラス玉に光る青。私はプロムのお礼を言えただろうか。

小学校5年生にあがる春、当時所属していたガールスカウトの水質調査の一環として、一週間ハワイを訪れ、漠然と「あの家族がいる国だ」と感じた。私は彼らの国籍など知らないのだから、愚かな考えだったかも知れない。だが、その感覚によってその時はっきりと私の中に「いつか必ず英語を話せるようになってやる」という強い意志が生まれたのだ。

そんな経緯でいつしか強い望みとなっていたアメリカ大学留学の志を決定的にしたのが、今年の夏に行ったアメリカの高校での5週間のサマースクールだった。日本での英語の授業をきちんと受けてきたつもりだった私の多少の自信は、一瞬のうちに崩れ落ちてしまった。ESLのクラス分けで中の上あたりのレベルに認定された私は、あまりの会話の難しさに、自分からクラスを下げてもらったのだ。「日本人は文法ができてでも会話ができない」と世間でよく言及されるこの命題を、この時ほど身にしみて感じたことはなかった。「これはもう留学しかない！」この意気込みによってたどり着いたのが、このニューヨーク州立大学の留学プログラムだった。他にもたくさん資料を読んだ中でこのプログラムに決めた理由の一つに、高校2年生の今、留学を決めることができるということがあった。

私の通う高校は、根っからの進学校。夏が終われば高校2年生であろうと受験生扱いされることを知っていた私は、どうしても今、決めたかったのだ。それは辛い受験勉強から逃げたいが為ではなかった。できるだけ早くに将来の見通しを立て、自分の望む未来に向け、一直線に突き進みたかったからだ。早くに留学を決めた私の決断は功を奏し、思った通り受験モードに入った毎日の厳しい授業にも、最近始めたTOEFLの勉強と平行して、何とかこなすことに成功している。もしもまだ決まっていなかったなら、今頃もいろいろな事に注意が散乱し、学校の授業にも、留学の志にも、迷いのある中途半端な気持ちで望んでいたに違いない。

ところで、私が渡米して学ぶのは「国際関係学」である。私は敢えてアメリカでのこの学問に関心を持っている。なぜならアメリカには、日本とは比べ物にならないほどに多くの人種が関わり合いながら生活しているからだ。この点だけ取っても、この学問における視野の広さが期待できる。日本の大学生となり、ぬくぬくと生暖かい風に大切な時間をいつの間にか奪われてしまうよりも、私は外国人という立場で異国に立ち、激しい強風の煽りに耐えながらも、踏みとどまって世界を感じたい。その大きさや重さを感じたい。早すぎるかもしれないが、そんなことを考えていると、今から胸が高まって納まらないのだ。

最後に、私がこの文章の題とした「私を支える物」。それは私自身の英語を話せるようになる事への欲求と執着であり、興味ある学問への好奇心と向上心であり、そして何よりも最初に記した記憶の中のあの家族である。私を見つめ返す赤ちゃんの青いガラス玉の目の向こうに、私は確かにその時、世界を取り巻く澄み切った空の青さを見た。私はその青い空に、世界の平和を見出したい。私の思いが叶ったとき、私はまた改めて世界中の人々へ、ハートの色をした紅いプロムのお礼を言うことができるだろう。

<高校2年 10月に東京駅で面接。高校3年に同級生と1月入学(飛び入学)。順調に頑張っている>

留学について

大阪市 高校3年 王 康

私は、ただ今留学中です。日本に留学中です。なぜなら私は中国生まれ中国育ちの生粋の中国人です。8年前に両親の仕事の都合で、私はこの興味すら持ったことのない土地にやって来ました。その時から私は小さな留学生になりました。私は日本にいたこの8年間で一番感じられたのは、やはり私は中国人であることです。誰かと初対面で会う時には、必ず私は中国人ですと初め説明してしまう癖がいつの間にかついていました。後になって人に軽蔑されるのがこわかったからです。

しかし日本人は優しくかった。そういうことは、私の心配とうらはらに全然なかったです。友人など周りの人々は、いつも私に優しく接してくれました。しかし、人は許しても日本のシステムはこれを許さない。結局、この国は私を外国人扱いする。どの国もそうかもしれない。きっと中国も同じだと思う。これは仕方のないことで、ある意味当然であると思えるようになりました。

そういうことを思っていたせいか、私はずっとアメリカに憧れていました。映画で見たアメリカの社会はいろんな人種がいてみんながお互い尊重しつつ暮らしている。アメリカに長く住むとそこの国籍を取ることが出来る。しかし日本ではそれがなかなかできない。その政治システムこそ、国を表しているのだと私は思います。だから私はこのまま日本の大学に進学しても自分のしたい生き方はできないと思いました。

私は高1のときに留学を考え始めました。両親は貿易をやっているので、英語は仕事上なくてはならないものと知り、私の留学を期待以上に応援してくれました。そして高2からは TOEFL の勉強も始めました。でも現実には私が思っていたほど甘くなかったのです。テストを受けても勉強の成果が出ない。テープを聴いてもリスニングは上達しない。

やはり留学センターに通うしかないと思えました。そこで私の学校探しが始まりました。いくつかの大学の説明会にも行き、留学フェアでも話を聞き、たくさんありすぎて、面倒くさいと思うことさえありました。

そんな時でした。私とニューヨーク州立大学との出会いは、みんなみたいに運命的なものではなかったのですが、父がインターネットで偶然見つけ、半信半疑の気持ちで電話しました。TOEFL のいらない入学なんて、そんな甘い話はない。しかし話を聞くにつれ、私のひねくれた考えがくつがえされました。父と一緒に入学説明・面接の時に、私はこの大学に決めました。

ところで私は高3の夏に2週間アメリカにホームステイしたことがあります。ホームステイ先の家族ともそれなりに会話できたし、いろいろ知ることができました。しかし私が一番失望したのは、英語ではなく自分の中国や日本への知識不足でした。10年間住んでいた中国、8年間勉強した日本、私はどちらも中途半端にしか知りませんでした。自分がすごく恥ずかしかったです。

興味が全くなかった日本は今やサッカーの試合で必ず応援してしまうようになっていた。きっと日本には何かがある。しかし私には分からない。私はまだ日本をあらゆる面から見たことがないのを改めて知らされました。よその国、他の文化を知る前に私は中国人、いや日本人としての基礎、アイデンティティをしっかりとさせなければ意味がないのです。私はこれから英語を勉強しつつ、日本の文化についても勉強していきたいです。

アメリカへの留学は日本での留学とは違う。今の私にはそこへ行く目標がある。私はアメリカにいくつも疑問を抱いている。中国や日本に比べて歴史があまりにも短いアメリカがなぜ世界のリーダー的存在になっているのか、なぜそうでなければならないのか。そしてなぜアメリカの食生活は太りやすいのかなど大きいこと、小さいこと、どうでもいいと思ってしまうことも私は聞きたいです。そして、そういった質問を私自身で答えを見つけていきたいです。

<大阪駅で父親と一緒に面接。当教養課程から SUNY Buffalo に編入。中国青島市出身。>

留学するにあたって

愛知県豊橋市 高校二年 北原洋子

この頃ふと、「私が外国を意識し始めたのはいつの頃だったのだろう」と考
えることがある。答は多分、私がまだ幼稚園に通っていた頃——母のいとこ
の子供がアメリカ留学をした時。大学生だった彼女は姉妹校留学の権利を手
に入れるために必死に勉強し、何度も難しいテストを受け、そして自分で
自分に羽根をつけて新しい国へ飛んで行った。その頃の私は幼すぎて、アメリ
カが何処にあるのかもわからなかったけど、自分の力で自分の進むべき道を手
に入れた彼女をすごいと思った。一年の留学を終え帰ってきた彼女はやはり、
自分の夢をアメリカに託し数年後また飛び立って行った。その努力の結果、彼
女はGMに勤め世界を飛びまわるとなった。その間私は、外国を意識しつつ
も「私には無理だ」という考えを胸に、普通に大きくなってきたわけだが、高
校受験の時にその考えは変わった。ふと見つけた高校の学校紹介には英語に重
点を置いていその校風と、その学校の姉妹校の事や海外にある語学学校の事
がくわしく記されていた。私立の中学に通っていた私は受験なしで上の高校に
上がれるにも拘わらず、今の高校と語学留学に夢を託した。それが私の海外へ
の第一歩だった。

一年のニュージージーランドでの海外生活を終え帰ってきた私は、友達に一年の
遅れを取りながらも高校二年生にならう焦ることもないのだったが、三年にな
った友達にぶつかって別羽詰まってるのを見て、私まで慌てしまっただけだ。その時の私は行き
たい大学（目標）も得になく、ふらふらしている状態だった。日本の大学に行
きたかった。ただ漠然と自分の将来に不安を抱いているだけだった。日本は不景
気だ。有名大学を卒業したり人すら就職するのが難しい世の中になっ
ていた。数年前とは打って変わって英語を話さなければ就職すら出来な
い会社も増えてきた。重宝されていた英語はいつの間にか、仕事をする上
での単なる道具になっていたのだ。

私には夢がある。ライトアテンダントになりたいのだ。それには英語が絶
対不可欠だった。私は目標を外国の大学に置いて、いろいろ探した。その
時見つけた大学は十校近くあったが、その中で特に私の目を引いたのが、この
ニューヨーク州立大学だった。募集要項を読んだ私は胸がワクワクするの
を感じた。自分のやる気があれば、自分も叶えられると思っただけで、英
語を自然に身につけることが出来、プラスいろいろな専門分野を学ぶ事も出来
るわけだ。日本ではいくらか大学の英文科に入学しても、英語を話せるよ
うにならないうけではない。日本にこのままいれば、国際的な世界観が身
につくわけでもなく、視野も狭まるだけのような気がした。万一、将来自
分の夢が変わってしまったとしても、英語プラス専門知識があれば、どう
にでも方向転換が出来ると考えた。私には英語が絶対不可欠だった。私
は目標を外国の大学に置いて、いろいろ探した。その時見つけた大学は十
校近くあったが、その中で特に私の目を引いたのが、このニューヨーク
州立大学だった。募集要項を読んだ私は胸がワクワクするのを感じた。自
分のやる気があれば、自分も叶えられると思っただけで、英語を自然に
身につけることが出来、プラスいろいろな専門分野を学ぶ事も出来るわけ
だ。日本ではいくらか大学の英文科に入学しても、英語を話せるようにな
らないうけではない。日本にこのままいれば、国際的な世界観が身につく
わけでもなく、視野も狭まるだけのような気がした。万一、将来自分の夢
が変わってしまったとしても、英語プラス専門知識があれば、どうにでも
方向転換が出来ると考えた。

私は世界中心と言われているアメリカから日本を見てみたい。自分が日本
人である事を忘れずに、他国から見た日本の良いところ、悪いところを知
りたい。日本で違国文化や生活に触れていきたい。その中で自分の才能を
出来る限り伸ばしていきたいと思う。時には他人に迷惑をかけるかもしれ
ない。人に助けてもらうことがあるかもしれないし、もしかしたら私が助
ける側にまわるかもしれない。私はアメリカという異国の地で、たくさん
の人に出会い、そして彼らとお互いを高めあいながら、器の大きい人間に
成長していきたいと思う。

入学が早く決まった私には、あと一年と少し、日本で過ごせる時間が残
っている。今の自分がやらなければならない事、それはもちろん勉強と日
本の文化・生活を少しでも多く学んでいくことではないだろうか？ものごと
一つ一つを大切に、残された時間を有意義に過ごしていきたいと思う。私
の未来に向かって飛んでいけるのかは、私のやる気と努力にかかっている。

(高校2年時に東京駅丸の内北口で面接)

留学

埼玉県越谷市 小島梨絵

私は最近、毎日が楽しくみでしかたがない。明日がとても待ち遠しいと思う。きつそれは、毎日が楽しくみでしかたがない。明日がとても待ち遠しいと思う。自分になりたいた昔かと思っ自分たし、今、刺激だからだと思。私はこんな留学という二文字をた遠い話のよ聞き流す人々がいる一方で、私のように自分の将来を映画のスクリーン並の大きさで描く人たちがいる。暗い話の多い日本社会の中で、まだ理想のや夢を追う人たちがいる人たちがいることは、素晴らしいことだと思し、自分もずっとそうでありたいと思う。

私は、高校一年生の時にニュージーランドに留学しているので、日本の学校に通っていた時にできた友達と、留学という言葉のつながりでできた友達を持っているのだが、この二種類の友達には大きな違いがみられる。いわゆる留学友達はたいして自己中心的である。地球は自分のために回っていると思、自分が常に主役なのだ。自分の価値観を強く信じているので、あまり世間を気にしない友が多い。それに比べると日本にいる友達は、常に自分が他からどう見られているか、自分が今どの程度にいるのかを裏で非常に気にしているように見える。どちらが良くてどちらが悪いというわけではないが、自分は留学友達といえる時の方が方が自然な気がする。正直言うと彼らといるとはちゃめちゃめお互いに自分たちの言いたい放題になりつしまっている時もあるが、私は相手の顔色をうかがいながら会話をするよりはずっと楽だと思。

私の留学仲間達に夢を語らせたなら、きつと右に出るものはいないだろう。そのスケールは日本の友達の数倍である。まず、彼らの視点は日本ではなく世界にあること。私を含めて皆、英語を学びたいから留学するのではなく、自分の勉強したいことや自分の夢が日本ではなく、外国にあるから留学するのだ。言ってみれば、夢に国境はないのだ。

私は今、弁護士になりたいという夢がある。普通の日本人ならきつと迷わず日本の一流大学の法学部に入ることを目指すだろう。でも私から言わせればその選択はいくつかある中の一つにすぎない。世界を視野に入れてみると、日本には弁護士がまだまだ少ない。それは裁判をなかなか起こさずしなない日本人の性質が関わっているのかも知れないが、そこで私は日本人は日本でしか弁護士になれないのだろうかと思った。多分この発想が出てくるのが世界を視野に入れてしていることだと思。

そして私は、アメリカという裁判を日常茶飯事のように起こす国を見つけることができたし、そんな国で弁護士になりたいという大きな夢ができた。留学仲間のほとんどがこんな発想から留学を決めている。

ここで私が思うのは、自分が恵まれているということだ。だれもが私たちのように自分に素直な人生を歩むことができるわけではないということには十二分に分かっている。また、留学生は自分が日本人であることを深く意識するようにもなる。私はこんな小さな事が、実はすごく大切なんだと思。日本で人種を意識することはほとんど無い日本人が海外へ行くと本当に学ぶことがたくさんあると思。

私は今、映画館の大きなスクリーンで自分の夢を見るためのチケットを手に入れただけで、それを実現するためにはまだまだ長い年月がかかる。でも何年たっても、今の自分のように、毎日が楽しみでしかたがなく、明日がとても待ちどろしい、夢にまっすぐな自分でいたい。

アメリカという大きな国が自分にとってどんな国になるかはまだ分からないが、私の夢へのチケットをくれたことは事実だ。

<NZの高校を12月中旬に卒業して1月末入学。鹿児島市で面接。教養2年課程を1年4ヶ月で修了(飛び級)。専門課程の編入先がSUNY Albany, SUNY Buffalo, SUNY Binghamton, Boston Universityの4大学から合格通知。SUNY Buffalo専門課程も1年半で卒業(飛び級)＝大学4年間を3年間で卒業(飛び級)。作文から分かるように当初は法律(弁護士)を専攻するつもりであったが、教養課程で幅広く勉強する中に最終的にビジネスを専攻することに決めた。現在NY市マンハッタンにある公認会計事務所で頑張っている。>

留学にあたって

高知県 高3 高橋 志英

僕が留学を決めたのは多分他の人達より遅かったと思う。高校1～2年で留学を考えていた人がほとんどだと思うが、僕が決めたのは高3の6月に入ってからだった。どうしてその時期に決めたかという、4月に参加したサハラマラソンが要因だと思う。このマラソンはモロッコで行われていて、世界で最も過酷であると言われている。

このマラソンはサハラ砂漠の キロを毎日の衣食住のすべてを背負って走る 歩くレースである。暑さは日中は 度を越し、夜は 度以下になる。毎日決められたゴールを目指して走り、ナイトコースを夜通し走る日もあった。母が趣味でマラソンをしていて、長年夢だったサハラマラソンに参加したいということで、僕も一緒に参加することになった。

毎日が自分との闘いで、実際7日間あるレースでわずか2日目にして倒れて、点滴を打つことになってしまった。しかし母や他の日本人のメンバー、外国人の参加者、スタッフの人達に助けられ、何とか完走 ほとんど歩いたけれど することができた。どこまでも広がる砂漠や夜空に浮かぶ満点の星々に感動し、何物にも優るすばらしい体験が出来たととても嬉しかった。

けれど、そのレース中には毎朝コースの説明がスタッフからされるのだが、フランス語と英語が使われていた。開催しているのがフランスで、参加者に多くのフランス人がいるのでフランス語、そして世界の共通語である英語が使われていたのだと思う。フランス語はまだしも、日頃学校で習っているはずの英語ですらまともに聞きとれず、もどかしさを感じた。

しかし、レース中に近くを歩いているランナーや、途中見回りをしているスタッフの人達が「Are you OK?」やフランス語で元気かという意味の「サバ?」という言葉をかけてくれた。気分が楽になり、言葉も分からない異国人の人達と一つになれた気がした。この時もっと英語が話せて、いろいろな人と会話ができて、友達になれたらどんなにいいだろうかと思った。日本だけでなくもっと世界中に自分の範囲を広げたい。これが留学したいと思った大きな理由だ。

また、このサハラマラソンによって夢もできた。それはもう一度サハラマラソンに参加することである。その時には英語で自由に会話し、いろいろな国の人とコミュニケーションがとれて、本当の意味でサハラマラソンを完走したいと思う。そしてもう一つ、世界を飛び回る仕事に就きたいと思う。たくさんの国々の風土や文化に触れることができれば、どんなにすばらしいことか。それは自分を成長させ、かけがえのない財産になると思う。

その夢を実現させるためには、留学するのが一番近道だと思う。英語が話せることは最低条件だし、国際的な視野を身につけるためにも、やはり外国へ出て直接その文化を体験する必要があると思う。日本の大学へ進んでも、ある程度の英語力や知識は身につくと思うけど、本当に世界に出てやっていくための必要なステップだと思う。

最近知ったのだが、世界の大学ランキングで、日本で一番の東大は 100位にも入っていないという。また TOEFL のテストだと思うが、日本人の平均得点は、アジアの中でも最低のレベルであるということだ。確か日本は世界でも、かなり学校での勉強時間が長いといわれていたような気がするが、ではなぜこれほど学習能力が低いのか。それはやはり日本の教育システムにあると思う。日本の高校の教育は大学受験のためのもので、知識だけでしかない。だからアメリカの大学で生きた英語を学び、そしてアメリカの進んだ学問、心理学を学びたいと思う。

人生において、自分の進むべき道を決めるターニングポイントがいくつもある。僕にとっては中学受験の時であり、サハラマラソンであり、そしてもちろんこの留学である。この留学は僕にとって人生で一番の決断だったと思う。もしこの留学が失敗に終わったとしても、自分で決断したことを自信に思っている。

<大阪空港で面接。当大学教養課程から立命館大学の専門課程に編入して頑張っている>